

## 要旨

### 『ハリー・ポッター』とハウスエルフたちの沈黙 —ハウスエルフは ‘beast’ か ‘being’ か?—

高橋 優佳

「ハウスエルフ」(house-elf)はJ・K・ローリング(J. K. Rowling, 1965-)の『ハリー・ポッター』シリーズ(*Harry Potter series*, 1997-2007)に登場する魔法生物であり、魔法界では魔女や魔法使いたち、つまりはヒトによって奴隷的扱いを受けている。また、ハウスエルフは本来であれば魔法生物の中でも‘beast’と‘being’のどちらかに分類される筈であるが、作中ではその定義が明確に行われていない。本論文では、魔法界で長年築かれてきた「伝統」が、ハウスエルフから権利や尊厳を奪っているだけでなく、そうした状況に抗議できない沈黙を強いられた存在に陥れていることを見出していく。本シリーズにおける種差別の問題を考察する中で、映画版『ハリー・ポッター』シリーズ(2001-11)も考察対象とし、映画版において唯一、ハウスエルフのドビー(Dobby)に対して敬称を付けた人物の存在も示唆する。

## Abstract

### *Harry Potter and the Silence of the House-Elves: Are House-Elves ‘Beasts’ or ‘Beings’?*

Yūka TAKAHASHI

House-elves are one of the Magical Creatures in the *Harry Potter* series (1997-2007) by J. K. Rowling (1965-). They are enslaved by witches and wizards (human beings) of the wizarding community. House-elves are supposed to be classified as ‘beast’ or ‘being’, but no one (witches nor wizards) has ever defined who they are or ever treated them as ‘human being’. This paper argues that the long ‘tradition’ of the wizarding world as depicted in the *Harry Potter* series account for why the rights of House-elves are denied by humans and why they are reduced to silence, unable to represent themselves. To analyse the issues of speciesism in this series, this study also focuses on the film version (2001-11) and indicates the presence of the person who treats Dobby the House-elf respectfully by using honorifics such as ‘Sir’ or ‘Mr’.

# 『ハリー・ポッター』とハウスエルフたちの沈黙

—ハウスエルフは ‘beast’ か ‘being’ か?—

高橋 優佳

## 1. はじめに

本論文では、J・K・ローリング (J. K. Rowling, 1965-) の『ハリー・ポッター』シリーズ (*Harry Potter series*, 1997-2007)<sup>1</sup> に登場する、魔法界で奴隷的労働を強いられている「ハウスエルフ」(house-elf)<sup>2</sup> に注目し、特にハウスエルフが ‘beast’ (動物) か ‘being’ (存在)<sup>3</sup> か、という定義が作中では明示されていないことを問題とする。この事実は、魔法族(ヒト)<sup>4</sup> が歴史的にも作中での法制度的にも、ハウスエルフにヒトたる権利を与えていないことを意味しており、魔法族と魔法生物が集う「魔法使い評議会」(The Wizard’s Council) に、ハウスエルフが出席できていないこともその具体例である。そのため、ハウスエルフは自分たちの置かれた境遇に抗議するための「声」を奪われ、「沈黙」を強いられているのである。ハウスエルフを取り巻く描写の中でも注目すべき点は、主人公のハリー・ポッター (Harry Potter) の親友のハーマイオニー・グレンジャー (Hermione Granger) がシリーズ中盤から取り組んだ、ハウスエルフの社会的地位の向上や、待遇の改善を目指して設立した「しもべ妖精福祉振興協会」(the Society for the Promotion of Elfish Welfare; 通称 S・P・E・W) の活動である。ハーマイオニーの当初の目的は、魔法族と ‘being’ に分類される魔法生物の代表が集う「魔法生物規制管理部」(the Department for the Regulation and Control of Magical Creatures) での会議にハウスエルフの代表者が出席できるようにすることであった。しかし、この会議に魔法生物が出席するには、‘being’ として認められる必要があるにも関わらず、彼女の活動はハウスエルフが ‘being’ であるか否かという点には重きを置いていない。本稿は魔法界において教科書として読まれている魔法生物に関する本の中ではハウスエルフが ‘being’ なのか否かという定義が行われていない点に着目し、本シリーズにおける種差別的構造を見出していく。その中で、ワーナーブラザーズ (Warner Bros.) 制作の映画版 (2001-11) におけるハウスエルフの描かれ方にも言及しつつ、<sup>5</sup> ハリーたちの学友ルーナ・ラブグッド (Luna Lovegood) に関しては、映画版においてはハウスエルフに ‘Mr’ や

‘Sir’などの敬称を付けている点にも着目する。

まずはハウスエルフという種族について、簡単に確認しておきたい。『ハリー・ポッター』シリーズには小鬼 (goblin) やケンタウルス (centaur)、巨人族 (giants) や狼人間 (werewolf) など、様々な魔法生物 (Magical Creature) が登場するが、ハウスエルフは第2巻『ハリー・ポッターと秘密の部屋』 (*Harry Potter and the Chamber of Secrets*, 1998; 以下 CS) で登場する。作中 (ゲーム作品を除く) で固有名詞を持って登場するハウスエルフは、第2巻から登場するドビーと、第4巻『ハリー・ポッターと炎のゴブレット』 (*Harry Potter and the Goblet of Fire*, 2000; 以下 GF) で登場するウィンキー (Winky)、第5巻『ハリー・ポッターと不死鳥の騎士団』 (*Harry Potter and the Order of the Phoenix*, 2003; 以下 OP) から登場するクリーチャー (Kreacher)、そして第6巻『ハリー・ポッターと謎のプリンス』 (*Harry Potter and the Half-Blood Prince*, 2005; 以下 HBP) で名前のみ言及されるホキー (Hokey) の4名で、その中でもドビーは多くの場面で主人公のハリー・ポッターや親友のロン・ウィーズリー (Ron Weasley)、ハーマイオニー・グレンジャーたちと関わり合っていく。

本シリーズにおいて、小柄で禿げ頭にコウモリのような長い耳とテニスボール大の目、甲高い声などの特徴を持つハウスエルフは、魔法の杖がなくても独自の魔法を駆使し、魔力の高い魔法族でさえ進入できないような場所にも出入りできる。実際に第7作『ハリー・ポッターと死の秘宝』 (*Harry Potter and the Deathly Hallows*, 2007; 以下 DH) では、ハウスエルフの特殊能力がハリーたちの命を救うこととなる (DH 378-79)。このように、ハウスエルフは魔法界の住人らしい存在ではあるが、実際には、作中では差別的扱いを受けている。

『ハリー・ポッター』シリーズにおいて、ハウスエルフは唾棄すべき存在として描かれ、尊厳は無視されている。このことは、ハリーの両親を殺害し、魔法界では闇の帝王 (Dark Lord) とも称されるヴォルデモート卿 (Lord Voldemort) の最盛期におけるハウスエルフの境遇について、ドビーが ‘We house-elves were treated like vermin, sir!’ (CS 194) と語る台詞などから読み取れる。また、女性のハウスエルフであるウィンキーの主人であったパーティ・クラウチ (Barty Crouch) がウィンキーを眺める様子は、“as though she was something filthy and rotten that was contaminating his over-shined shoes.” (GF 153) と描写されており、クリーチャーはその名の響きの通り “a disposable creature” (DH 160) としてヴォルデモート卿に実験台にされ、命の危機に瀕したことがあった。こうした描写からも、ハウスエルフが時に汚物か使い捨て品のような扱いを受けていることが確認できる。しかし、ハウスエルフはただ差別されているだけではない。過酷な環境下で労働する奴隷的存在なのだ。

ハウスエルフが奴隷のように描かれている箇所は枚挙にいとまがない。例えば、ハウスエルフは強い魔力を持っているにもかかわらず、ハウスエルフは主人からの命令には逆らうことができず、主人から衣服を贈られる(解雇される)まで、一生その家の家族に仕えることが魔法界の契約で定められている(CS 20; 193)。また、ハウスエルフは魔法界の旧家でお金持ちの屋敷や城などで雇われている存在である(CS 36)。特に重要なのは、ハリーたちの学び舎で、アルバス・ダンブルドア(Albus Dumbledore)が校長を務めるホグワーツ魔法魔術学校(Hogwarts School of Witchcraft and Wizardry)に関する記述である。この学校では、100人以上のハウスエルフが無賃労働を休みなく行っているが、ロンの‘They like being enslaved!’(GF 247)という台詞から、ハウスエルフの奴隷的労働が魔法族にとっては「常識」となっていることが分かる。また、ハウスエルフ自身も自分たちが奴隷であることを認めている。ドビーが自分たちハウスエルフのことを‘the lowly, the enslaved, us dregs of the magical world’(CS 194)と卑下する台詞がその典型である。ハウスエルフが奴隷的存在だということは、自他共に認める、魔法界では広く共有された事実なのである。

ただし、こうした点は先行論でも既に論じられている。スーザン・K・バートン(Susan K. Burton)は、ハウスエルフやルビウス・ハグリッド(Rubeus Hagrid)のようなホグワーツの職員は(労働者階級に分類される)典型的な使用人で、「訛りの激しい方言でしゃべり、感情の抑制がきかずにすぐに泣いたり怒ったりする、コミカルな人物たち」として描かれていることを指摘している(バートン 247)。三浦玲一は、ハーマイオニーが設立した「しもべ妖精福祉振興協会」での活動を例に挙げ、この活動の目的はハウスエルフが賃金を得られるようにすることになっている点から、本作の「奴隷解放は低賃金労働者になること」であると指摘し、少ない給料に対して相互に「同意」して仕事を続ける構図になっている点から、奴隷制廃止は新自由主義に吸収されていると指摘している(三浦 42)。

バートンや三浦はハウスエルフの労働環境を、実際の社会や歴史における労働問題と関連付けて論じており、重要な指摘を行っているが、何故ハウスエルフが奴隷的労働を強いられているのか、そもそもハウスエルフはヒトなのか否か、という点については両者とも言及していない。この点に関しては、ドミニク・チータム(Dominic Cheetham)が言及している。チータムは、「屋敷しもべ妖精」であるハウスエルフは「人間」ではないと記しつつも(チータム 103)、ヒトの言葉を話すハウスエルフの言語能力や道徳観、倫理観などの高さを指摘した上で、ハウスエルフは「人間とは違う姿をしていても、その知性は人間と同じであり、言葉の能力でも、倫理面での認識でも人間に引けを取らない」存在であり、「まさしく人間だとすれば、

それにふさわしく、他の人間と同じような権利を与えられてしかるべきなのである」と記している(チータム 105-7)

ここまで確認したように、チータムはハウスエルフが「動物」もしくは「人間に引けを取らない」存在であると示唆しているが、ハウスエルフがヒトであるか否かを議論するには、そもそも『ハリー・ポッター』の作品世界ではハウスエルフがどのような存在として定義されているかを確認する必要がある。そこで本稿では、ハウスエルフという種族の定義が作中では明確には行われていないという、先行論ではあまり注目されてこなかった点に着目したい。ハウスエルフは果たしてヒトに近い存在なのだろうか、それとも全く異なる種族として分類されているのだろうか。

## 2. ハウスエルフとはどのような存在か？

本節では、『ハリー・ポッター』の作品世界がハウスエルフをどのような存在として描いているかについて考察する。まずは、本シリーズにおける魔法生物の区分や定義を確認したい。

### 2.1. 定義されないハウスエルフ

ハウスエルフが何者なのかについては、作中では曖昧に描かれている。例えば、ローリングは作中でホグワーツの指定教科書として登場する教科書の著者で、2016年以降に公開されているスピンオフ作品『ファンタスティック・ビースト』シリーズ (*Fantastic Beasts series*, 2016-) の主人公でもあるニュート・スカマンダー (Newt Scamander) の名義で『幻の動物とその生息地』 (*Fantastic Beasts & Where to Find Them*, 2001; 以下 *FB*) という本を2001年に出版している。しかし、そこにはハウスエルフに関する記述が一切ない。内容を実際確認していきたい。

スカマンダーの教科書には、魔法生物が基本的に ‘beast’ か ‘being’ に分類されていることが記されている。<sup>6</sup>魔法界の政府機関、魔法省 (Ministry of Magic) の前身である「魔法使い評議会」では、“any member of the magical community that walked on two legs would henceforth be granted the status of ‘being’, all others to remain ‘beasts’.” (*FB* xix-xx) と定められ、当初の ‘being’ としての条件を満たす種族が、‘being’ を代表する小鬼によって招集された。しかし、中には二足歩行でもヒトと意思疎通ができない種族もあり、“the mere possession of two legs was no guarantee that a magical creature could or would take an interest in the affairs of wizard government.” (*FB* xx-xxi) と判断された。その後、‘being’ の定義は “those who could speak the human tongue” (*FB* xxi) となり、評議会のメンバーと意思疎通ができる者が会議に招かれた。ところが、ヒトの言葉は理解するが知性や道徳的責

任能力の欠如した種族も集い、またもや会議が妨害されたため、‘being’は“any creature that has sufficient intelligence to understand the laws of the magical community and to bear part of the responsibility in shaping those laws” (FB xxii) と再定義された。この定義を踏まえ、外見はヒトとそっくりでも意思疎通ができなければ、‘beast’に分類された (FB xxii)。

上記の定義を踏まえると、ハウスエルフはヒトの言葉を理解して話すことができ、知性も責任能力もある程度備わっているため、‘being’として解釈することができる。しかし、本の中では小鬼が‘being’であることは示唆されているものの、ハウスエルフに関しては、どちらに分類されるのかは一切言及されていない。この点は先行論でも指摘されているが (Walter 33)、<sup>7</sup>中にはハウスエルフが‘being’に分類されると表記している先行論もある (河 76; 高橋 43; 寺島 290)。確かに、ニュート・スキヤマンダーは、かつて魔法省で「魔法生物規制管理部」の「屋敷しもべ妖精転勤室」 (the Office for House-Elf Relocation) に2年間勤務しており、その後‘the Beast Division’という動物専門の部署に移っている (FB 87)。そのため、ハウスエルフは少なくとも‘beast’ではないと解釈できる。しかし、作中では明記されていないため、そのように推察できるというだけである。

このようにして、ハウスエルフの定義が明確に行われていないことにより、ハウスエルフがヒトとは異なる存在の‘beast’なのか、それともヒトに限りなく近い知性や能力を持つ‘being’なのかという点において、魔法族の間で認識が分かれている。次項からはその具体的な場面を確認したい。

## 2.2. 魔法族によるハウスエルフの奴隷扱い

ここからは、魔法族 (ヒト) がハウスエルフを奴隷扱いする描写を、まずは女性のハウスエルフのウィンキーを例に確認していく。魔法生物規制管理部に勤めるエイモス・ディゴリー (Amos Diggory) はウィンキーを、つまりはハウスエルフのことを「ヒトならざる生物」 (non-human creature) と称していた。このことは、次の場面から確認できる。第4巻では魔法界の競技クイディッチ (Quidditch) のワールドカップが開催され、ハリーとロン、ハーマイオニーはウィーズリー家の者たちと共に試合観戦をするため会場を訪れていた。その後、ヴォルデモート卿の手下の死喰い人 (Death Eater) が会場を襲撃し、後に「闇の印」 (the Dark Mark) というヴォルデモート卿の印が何者かによって空に打ち上げられる。ロンの父で魔法省の役人でもあるアーサー (Arthur) やディゴリー氏が現場に駆け付けると、クラウチ氏に仕えるハウスエルフのウィンキーが魔法使い (ハリー) の杖を持って気絶した状態で発見される。この事実に対し、ディゴリー氏は ‘Had it [a wand] in her hand. So

that's clause three of the Code of Wand Use broken for a start. *No non-human creature is permitted to carry or use a wand.*' (GF 148-49) と述べる。その後、闇の印はハリーの杖から出されたものであることが判明し、ウィンキーは 'I is a good elf, I isn't using wands, I isn't knowing how!' (GF 152) と弁明する。ウィンキーは主人のクラウチ氏から、自分がトラブルの対処で出かけている間はテントにいるように言いつけられていたものの、死喰い人の襲撃による恐怖でその場を離れ、逃げた先でハリーの杖を偶然見つけたに過ぎない。しかし、彼女の言葉は聞き入れられることはなく、ディゴリー氏には '*You've been caught red-handed, elf! [...] Caught with the guilty wand in your hand!*' (GF 152) と問い詰められる。また、クラウチ氏はウィンキーが自分の命令に背いて持ち場を離れ、挙句の果てには自分に恥をかかせたことを快く思わず、最終的には 'I have no use for a house-elf who disobeys me, [...] I have no use for a servant who forgets that is due to her master, and to her master's reputation.' (GF 155) と言い放ち、ウィンキーを解雇する。

ハーマイオニーは、ここまで確認してきたディゴリー氏やクラウチ氏のウィンキーへの態度に対し、'it was like she [Winky] wasn't even human!' (GF 156) と憤慨する。それに対してロンは 'Well, she's not,' (GF 156) と、平然と答えていた。彼の台詞は、ハウスエルフのことを 'human being' ではない存在として認識していることを示していると同時に、ディゴリー氏やクラウチ氏たちのウィンキーに対する態度には特に疑問を抱いていないことも確認できる。

こうした反応は、ロンに限った話ではないようである。彼の兄で魔法省に入省しているパーシー (Percy) はクラウチ氏を擁護しており、ウィンキーを弁護するハーマイオニーに対しては 'a wizard in Mr Crouch's position can't afford a house-elf who's going to run amok with a wand!' (GF 158) と返答し、クラウチ氏のウィンキーへの対処の正当性を主張していた。

ここまで、4人の魔法省の役人たちのウィンキーに対する態度を見てきたが、ハウスエルフが杖を所有・使用する権利を与えられていないことや、アーサーを除く3人の役人がハウスエルフの尊厳を無視していることや、<sup>8</sup>ロンがハウスエルフをヒトとは認識していないことが確認できた。

ウィンキーの不遇を目の当たりにしたハーマイオニーはハウスエルフの奴隷労働の歴史について調査し、'I can't believe no one's done anything about it before now.' (GF 247) と憤り、ハウスエルフの社会的地位向上や待遇の改善を目指した「しもべ妖精福祉振興協会」を設立する。活動を始めるにあたり、ハーマイオニーは自身が所属するグリフィンドール寮の生徒たちに 'You do realise that your sheets are changed, your fires lit, your classrooms cleaned and your food cooked by a group of

magical creatures who are unpaid and enslaved?’ (GF 263) と呼びかけながら入会・寄付を迫る。その結果、ハーマイオニーに睨みつけられるのが嫌で入会費を支払った者たち(ハリーやロンも含め)を除き、数名は彼女の話に興味を持ったものの、活動の参加自体には乗り気ではなく、その他の者たちの多くは冗談扱いしていた。

ハウスエルフに対するこのような認識は生徒たちに限った話ではない。ホグワーツでは番人と魔法生物飼育学 (Care of Magical Creatures) の教師を兼任する半巨人 (Half-giant) のルビウス・ハグリッドも、魔法生物愛好家ではあるがハウスエルフに権利や賃金を与えようとするハーマイオニーの考えには反対していた。彼はハーマイオニーの勧誘をきっぱりと断った上で ‘It’s in their nature ter look after humans, that’s what they like, see? Yeh’d be makin’ ’em unhappy ter take away their work, an’ insultin’ ’em if yeh tried ter pay ’em.’ (GF 291-92) と語る。結局、ハーマイオニーの活動を支持する者は作中では現れず、次節で詳述するが、ハグリッドが述べていたように、ハウスエルフ自身も奴隷労働から解放されることの重要性を主張するハーマイオニーの活動を拒絶している。このことから、魔法界ではハウスエルフの奴隷的労働は一種の「常識」として捉えられていることが分かる。

### 2.3. 魔法界の「伝統」に沈黙させられたハウスエルフ

ハウスエルフの奴隷労働が魔法界の「常識」となっていることは前項で確認したとおりだが、ハウスエルフは自分たちの待遇に対して疑問を持ち、声を上げることはないのだろうか。ここからは、ハウスエルフが自分たちの置かれた状況に対して抗議するための「声」が奪われ、沈黙を強いられている側面に注目した上で、ハーマイオニーが設立した「しもべ妖精福祉振興協会」の活動を確認したい。彼女の活動目的は以下の通りである。

‘Our short-term aims, [...] are to secure house-elves fair wages and working conditions. Our long-term aims include changing the law about non-wand-use, and trying to get an elf into the Department for the Regulation and Control of Magical Creatures, because they’re shockingly under-represented.’ (GF 247)

引用で示されているように、ハウスエルフは自分たちの境遇に対して声を上げることができずにいた。そもそも、ハウスエルフは主人の悪口や不満を言うことができない。この事実は、次の台詞に示されている。以前仕えていた主人(次節で詳述)の悪口を言ったことで己を罰し始めたドビーに、ハリーが ‘Can’t house-elves speak their minds about their masters, then?’ (GF 416) と尋ねると、ドビーは



‘Tis part of the house-elf’s enslavement, sir. We keeps their secrets and our silence, sir, we upholds the family’s honour, and we never speaks ill of them’ (GF 416) と返答する。ドビーの述べる掟のようなものは、文書等で明確に定められたものであるかは定かではない。しかし、この台詞によってハウスエルフが主人に不満を持つ場合があることが明らかになる。また、こうした概念が魔法界の歴史の中で築き上げられてきた「伝統的」なものであることは明白であり、その「伝統」が、結果的にハウスエルフを抑圧し、自分たちの境遇に対して意見・抗議する権利と「声」を奪っているのである。

ここまで確認した内容から、ハウスエルフの奴隷的労働や境遇は、魔法界で生まれ育った魔法族のみならず、大半のハウスエルフたち自身にも「常識」として根付いていることが分かる (GF 291-92)。しかしながら、こうした背景には、本節序盤でも述べたように、スキヤマンダーの教科書ではハウスエルフがどのような種族で、‘beast’ と ‘being’ のどちらに分類されるのか、という定義が作中で明示されていないことが起因している可能性には留意すべきである。また、ハーマイオニーの活動も、当初こそハウスエルフの権利を魔法界で認めさせることを目標としていたものの、彼女もまた、ハウスエルフが ‘being’ か ‘beast’ であるかという問題については触れていない。加えて、ハーマイオニーの関心事が中盤からはハウスエルフが自由であるか否か、という点にすり替わっていることが、ハーマイオニーの活動を ‘house-elves has no right to be unhappy when there is work to be done and masters to be served.’ (GF 585) と拒絶するハウスエルフたちの台詞 (GF 585) に対し、‘You’ve got just as much right as wizards to be unhappy! You’ve got the right to wages and holidays and proper clothes, you don’t have to do everything you’re told-’ (GF 585-86) と説く台詞や、第5作で ‘Of course they [House-elves] want to be free!’ (OP 230) と信じて自作のハウスエルフ用の服をゴミくずで隠し、掃除をしに来たハウスエルフたちが衣服を拾うよう仕向ける様子などからも確認できる。こうしたハーマイオニーの一連の言動は、本来の目的からは逸れた形となっている。

ハウスエルフは多くの場面に登場しながらも、種族の生い立ちや奴隷的労働を強いられたようになった経緯など、多くのことが明らかにされていない。作中での設定に加え、作者のローリングの語ろうとしない行為が、ハウスエルフをより曖昧で不鮮明な存在にしていると言えよう。また、ハウスエルフの定義が示されていないが故に、魔法族は都合よくハウスエルフをヒトとは異なる存在と見なし、結果的には権利や尊厳だけでなく、自分たちの不遇に対して抗議するための「声」も奪っているのではないだろうか。

### 3. ルーナ・ラブグッドに見るハウスエルフ問題の変化の兆し

ここまで、魔法族の中にはハウスエルフを自分たちヒトとは異なる存在として捉え、尊厳を無視することがある点が確認できた。また、そもそもハウスエルフという魔法生物は‘being’なのか‘beast’なのか、という定義が作中では明示されていないことも確認した。魔法生物愛好家のスキヤマンダーが著書において数多の魔法生物について記している中、ハウスエルフに関する記述は欠落している実情も、魔法族によるハウスエルフ蔑視の具体例として挙げられるだろう。そのようなハウスエルフの境遇を改善するべく、ハーマイオニー・グレンジャーが設立した「しもべ妖精福祉振興協会」の活動もまた、ハウスエルフがヒトに近い‘being’なのか否か、という点については重視していなかった。本節では、映画版『ハリー・ポッター』シリーズにおいてハウスエルフのドビーに敬称を付けた唯一の人物である、ルーナ・ラブグッドの言動に注目したい。

魔法族に奉仕する種族でありながら自由を求め、魔法界では‘weirdos’ (GF 291-92) と見なされていたドビーは、本作第2巻の時点では、ホグワーツでハリーと敵対しているドラコ・マルフォイ (Draco Malfoy) の一族に仕えており、日常的に虐待を受けていた。しかし、ドビーからハウスエルフを解放する方法を聞いたハリーが第2巻終盤で機転を利かせ、ドビーがドラコの父ルシウス (Lucius) から衣服 (ハリーの靴下) を受け取るように仕向ける。ドビーは晴れてマルフォイ家から解放され、第4巻からはダンブルドアと契約し、給金の支払いと月に一度の休暇を条件にホグワーツ城で働き始める (GF 413-14)。

その後は様々な場面で恩人のハリーを手助けするドビーだが、彼は第7巻の中盤で、かつての主人であるマルフォイ家の者たちと対峙し、最期を迎えることとなる。「貝殻の家」 (Shell Cottage) という場所に住むロンの兄、ビル (Bill) からドビーの埋葬を提案されたハリーは、魔法を使わず自分の手で墓を掘ることが、自分たちの命を救った“the elf” (DH 387) の供養になると考え、魔法に頼ることなくドビーの墓を掘る。完成した墓には“Here lies Dobby, a Free Elf.” (DH 389) という言葉が刻まれる。

ここで、映画版『死の秘宝 Part2』 (Harry Potter and the Deathly Hallows Part2, 2011) の未公開場面における、ハリーたちの学友ルーナ・ラブグッドの台詞に注目したい。その場面では、ドビーの墓の前に佇むハリーの元にルーナが歩み寄り、ドビーの死について ‘The sky has lost a star. My father used to say that when a child died. Funny how Mr Dobby knew exactly where to find us.’ (f: DH Part2 Deleted Scene 2) と語る。<sup>9</sup>この台詞で注目したいのは、ルーナがドビーに付けた‘Mr’ という敬称である。映画版『ハリー・ポッターと死の秘宝 Part1』 (Harry Potter and the Deathly Hallows Part1, 2010) の本編においても、ハリーたちと同じくマルフォイ邸に囚われ

ていたルーナは、脱出作戦の鍵を握るドビーに向かって ‘Whenever you’re ready, sir’ (f: *DH Part1*, Ch. 28) と呼びかけていた。これらの台詞は原作にはない、映画版独自の設定であり、映画版のルーナは事実上、本シリーズにおいてハウスエルフに敬称を付けた唯一の人物である。ハウスエルフの法的地位については原作でも映画版でも明示されてはいないが、第1節で言及したように、ハウスエルフが ‘vermin’ のように扱われていたことから、社会的に低い地位であり、本来であれば敬称が付けられることもないことは明確である。このことは、ルーナに ‘Sir’ と呼ばれ、‘Sir? I like her very much.’ (f: *DH Part1*, Ch. 28) と嬉しそうにするドビーの反応からも読み取れる。<sup>10</sup>

映画版のルーナの言動は、他の登場人物には見られなかったものである。ニュートやハグリッドも、ルーナと同じく魔法生物愛好家だが、両者はハウスエルフの存在を「無視」、もしくはその境遇を「常識」と捉えていた。それに対し、ルーナはハウスエルフに敬意を表している。しかし、映画版と原作とでは、その描かれ方は異なっている。原作における次の台詞を確認したい。自分たちを救出して命を落としたドビーを埋葬する際、ルーナは ‘I think we ought to say something,’ (*DH* 388) と言い、‘Thank you so much, Dobby, for rescuing me from that cellar. It’s so unfair that you had to die, when you were so good and brave. I’ll always remember what you did for us. I hope you’re happy now.’ (*DH* 388) という言葉をドビーに送る。ここで注目したいのは、ドビーの呼び方である。引用からも分かるように、原作でのルーナはドビーに敬称を付けていない。この点から、ドビーに ‘Sir’ や ‘Mr’ などの敬称を付けた映画版のルーナの態度は、時には尊厳を無視するような言動を見せる魔法族(ヒト)とは対照的であり、彼女はハウスエルフの問題に変化をもたらし得る重要な役割を担っていることが分かる。

#### 4. おわりに

以上のようにして、本論文では『ハリー・ポッター』シリーズに登場するハウスエルフがヒトとは異なる ‘beast’ なのか、はたまたヒトに限りなく近い ‘being’ なのかという定義が作中で明示されていない点に着目し、作者のローリング自身が語らないことによってハウスエルフを曖昧な存在にし、自分たちの境遇に対して抗議するための「声」を奪っていることを見出した。

しかし、他種族だからといってその者に権利がないと考える理由にはならない。他種族の者を対象として見る際に、「ヒトではない」「ヒトと対等か否か」「ヒトのように」などのような、ヒトを基準にした考え方そのものが、非常に差別的であることは、今一度考えなければなるまい。これは白人至上主義や人間中心主義を掲げ、

非白人や他種族の者を排斥する思想と何ら変わらない。また、ハウスエルフの定義が行われていないことが、これまで作中や先行論でほとんど問題視されてこなかった事実こそ、注目すべきである。その点において、ハウスエルフに感謝と敬意を表し、映画版ではハウスエルフに敬称を付けた唯一の人物であるルーナ・ラブグッドは、本シリーズにおける種差別問題の鍵を握る人物と言えよう。

## 注

- 1 原作シリーズの各題名や固有名詞は基本的に松岡佑子訳に準じ、「第1巻」と表記する。
- 2 松岡訳では House-elf は「屋敷しもべ妖精」と訳されているが、既訳による先入観を極力除いて考察するべく、本稿では「ハウスエルフ」と表記する。
- 3 ‘being’ や ‘beast’ は、既訳ではそれぞれ「動物」と「存在」（ヒトたる存在）となっているが、注2と同様の理由で英語表記のまま記す。
- 4 ハウスエルフを人間とは生物学的には異なる種族として描かれている作品内の種差別を明示するべく、先行論の引用を除き、本稿では基本的に人間を「ヒト」と統一して表記する。
- 5 映像作品の場面は (f: *DH* Ch. 1) と、映像資料のチャプター番号を記し、「第1作」と表記する。
- 6 本稿では幽霊などの ‘spirit’ もしくは ‘has-beens’ に関する説明は省略する。
- 7 ウォルターは先行論で、スキヤマンダーが著書の中でハウスエルフに関して記述していない点について、“it is a consequence of their being overlooked, as they consistently have been, throughout wizarding history, just as other servants and slaves have been in the Muggle reality.” (Walter 33) と記している。しかし、スキヤマンダーがハウスエルフの存在を認知していることは、1920年代を描いたスピンオフ作品で確認できる。ハウスエルフはスピンオフ第1作『ファンタスティック・ビーストと魔法使いの旅』(*Fantastic Beasts and Where to Find Them*, 2016: 以下 *WFT*) にも登場し、スキヤマンダーはハウスエルフが働く様子を見つめている (f: *WFT* Ch. 2)、この描写を踏まえると、著書の中でハウスエルフについて語らなかったスキヤマンダーの行為は、意図的なものと言えよう。
- 8 アーサーだけはウィンキーに事情聴取をする際に優しく語りかけており (*GF* 151)、ハウスエルフはヒトではないと考えるロンに ‘That doesn’t mean she hasn’t got feelings, Ron, it’s disgusting the way-’ (*GF* 156) と憤るハーマイオニーに対し、アーサーは ‘I agree with you,’ (*GF* 156) と賛同していた。
- 9 ハウスエルフの幼児性については先行論でも言及されているが (高橋 47)、ドビーのことを “child” と表現する台詞には留意したい。映画版でドビーのことを “Sir” や “Mr” などの敬称を付けて呼ぶ唯一の人物であるルーナにさえ、ハウスエルフが魔法族 (ヒト)

よりも幼い、つまりは自分たちとは対等な立場にはないという前提が(無意識的に)内在していることが示されているとも解釈できるためである。

- 10 また、ハウスエルフは自分たちのことについて話す際、‘house-elves has’ や ‘I is’ などのような言葉遣いを用いるが、この場面ではドビーが ‘Dobby likes her’ ではなく ‘I like her’ と述べている点にも注目したい。

## 参考文献

- Fantastic Beasts and Where to Find Them*. Dir. David Yates. Warner Bros. Home Entertainment, 2017. Blu-ray.
- Harry Potter and the Deathly Hallows Part1*. Dir. David Yates. Warner Bros. Home Entertainment, 2018. Blu-ray.
- Harry Potter and the Deathly Hallows Part2*. Dir. by David Yates. Warner Bros. Home Entertainment, 2018. Blu-ray.
- Rowling, J. K. *Harry Potter and the Chamber of Secrets*. London: Bloomsbury Publishing, 1998.
- . *Harry Potter and the Goblet of Fire*. London: Bloomsbury Publishing, 2000.
- . *Fantastic Beasts & Where to Find Them*. London: Bloomsbury Publishing, 2001.
- . *Harry Potter and the Order of the Phoenix*. London: Bloomsbury Publishing, 2003.
- . *Harry Potter and the Half-Blood Prince*. London: Bloomsbury Publishing, 2005.
- . *Harry Potter and the Deathly Hallows*. London: Bloomsbury Publishing, 2007.
- Walter, Tiffany L. “Not So Magical: Issues with Racism, Classism, and Ideology in Harry Potter.” Northern Michigan University Master’s Theses (Master of Arts), May 2015.
- 板倉巖一郎、バートン, スーザン K.、小野原教子『映画でわかるイギリス文化入門』松柏社、2008年。
- 高橋優佳「『ハリー・ポッター』シリーズにおける正当化された奴隷労働 ―屋敷しもべ妖精の幼児性―」筑波大学比較・理論文学会『文学研究論集』(39)、2021年5月、39-52頁。
- チータム, ドミニク『成長するハリー・ポッター 日本語ではわからない秘密』小林章夫訳、洋泉社、2005年。
- 寺島久美子『ハリー・ポッター大辞典II 1巻から7巻までを読むために』原書房、2008年。

三浦玲一「選択と新自由主義と多文化主義——グローバル化時代の文学としての『ハリー・ポッター』シリーズ」日本英文学会『英文学研究 88』、2011 年、33-47 頁。